



TITLE:

開会挨拶

AUTHOR(S):

海田, 能宏

---

CITATION:

海田, 能宏. 開会挨拶. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1995, 10: 1-2

ISSUE DATE:

1995-11-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187518>

RIGHT:

## 開 会 挨 拶

海 田 能 宏  
(坪 内 良 博 代)

領域代表の坪内良博教授は後で述べます理由によりどうしても出席できませんので、私、事務局担当の海田が開会の挨拶を代読させていただきます。

重点領域研究「総合的地域研究」は2年目の終わりを迎えました。この重点領域研究では秋には京都で研究集会を開き、年度末には東京でシンポジウムを開くことが定例となって参りました。研究集会ではやや特殊なテーマを専門的に追求し、シンポジウムではやや一般的な話題に言及するのがその目的になりつつあります。本年度の研究集会では「発展の地域性」をめぐっての討論が去年の秋に行われました。また前年度、すなわち初年度のシンポジウムは「文明の地域性」と題し、公募班を中心にこの山上会館においてさまざまな話題が提供されました。

今回のシンポジウムでは少し焦点を絞って、「生態環境」を取り上げることになりました。東南アジアはかつて森林に覆われており、人々の生活も社会のあり方もこのことによって大きく規定されていたと考えられます。東南アジアでは現在でも森林の存在が重要な意義を持ち、同時にその破壊が顕著であるといわれています。生態環境をテーマにしたのはこのような生態環境のあり方を重視したからにはほかありません。

このテーマを取り上げるにあたっては、生態環境がどのようにして作られ維持されるかというメカニズムや人間や社会による生態環境に対する働きかけ等、生態環境に関わる諸側面からどれをどのように取り上げて論ずるか、このシンポジウムのプログラム決定までにはいろいろ苦心があったと聞いております。地域研究においては自然環境としての森林そのものだけが独立して研究・考察の対象になるのでは決してなく、人間、ひいては社会ないし文化との関わりが重要な視点となります。ここでは生態学の専門家等、自然科学者として訓練を受けた研究者と、社会科学や歴史学の研究者との対話が必然的に要請されます。この試みがこの場を借りて新たな進展をみることを期待したいと思います。

今回のシンポジウムの組織に際しては、A01班の研究代表者荻野和彦さんに献身的なご助力をいただき、A03班の原洋之介さんには共同組織者として何かとご尽力をいただきました。また年度末の大変お忙しい中、ご参集いただきましたここにおいでの方にも深くご礼申し上げます。まして挨拶に代えさせていただきます。

代読は以上です。領域代表がどうしても出席できない理由は次のとおりです。B01「外文明と内世界」クラスター担当の土屋健治京都大学東南アジア研究センター教授が2月27日の夜、急逝されました。坪内領域代表は東南アジア研究センター所長という立場からお通夜、告別式

---

の組織委員長・葬儀委員長をつとめており、こちらを欠席させていただくことになりました。  
この中にも土屋教授とお親しく、葬儀に出席すべきところをまげてこちらに来ていただいた方もおられます。ただいま葬儀がとり行われている最中でもあります。土屋教授の死を悼みましてここで黙とうを捧げることを皆様に提案させていただきたく思います。

黙とう。

ありがとうございました。